令和２年３月 10 日

久喜市立郷土資料館だより

笛（ふえ）の音（ね）

第 10 号

神明神社のオヒタキの様子
（令和２年２月９日撮影）

令和２年２月９日（日）に菖蒲町上栢間（しょうぶちょうかみかやま）の神明（しんめい）神社でオヒタキが行われました。オヒタキとは鎮火祭のことで、防火防災を祈願する意味が込められています。オヒタキの行程は次のとおりです。まず、午後２時頃から神社の拝殿で祭典が行われ、その後、宮司の先導のもと、氏子たちは境内の炊き火を囲んで、火の周りを３周回ります。１周ごとに手拍子（３・３拍子）を打ち、一礼をして息災を祈願します。かつては、オヒタキとともに筒粥（つつがゆ）の占いも行われており、米と筒状の葦（あし）を入れた鉄鍋を火にかけ、筒の中に入った米粒の数でその年の作物の豊凶（ほうきょう）を占ったといいます。オヒタキは２月 14 日前後の日曜日に行われており、地域に伝わる伝統的な行事の一つです。　（郷土資料館学芸員　星野　諒）

目　次

● 神楽の世界⑨ 昭和の神楽復興（後編）・・・・ 2

● 新出！資料紹介・・・・・・・・・・・・・・・・2
「東京両国通運会社川蒸気往復盛榮真景之図」

● 文化財調査の窓・・・・・・・・・・・・・・・ 3
「歌舞伎図絵馬」（久喜市指定文化財）

● お知らせ情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

神楽の世界　⑨　　昭和の神楽復興（後編）

鷲宮催馬楽神楽の最後の伝承者である白石國蔵氏の熱意、宮司の相沢正直氏や針谷健次氏の尽力が実り、昭和30年(1955)10月10日、鷲宮神社の例祭で30年ぶりに神楽を復活することができました。この頃、鷲宮神社神楽復興会が設立され、健次氏が初代の会長となり、神楽の復興の第一歩となりました。

昭和31年(1956)、埼玉会館で神楽が公開されることとなりました。その前日、國蔵氏は巫女に柿を食べさせようと木に登り、そこから落ち腰を痛めてしまいました。当日は医師の制止も聞かず、戸板で車に乗せてもらい、会場では背中を支えてもらいながら、力強い音色で笛を吹き通したといいます。

その後も、復興会の不断の努力が認められ、民俗芸能の研究者などから注目されるようになっていきました。

そのような中、昭和35年（1960）、埼玉県無形文化財に指定され、このとき会の名称を「鷲宮催馬楽神楽保存会」と改めました。また、同時に國蔵氏も「無形文化財鷲宮の催馬楽神楽の保持者」として認定を受けました。

しかし、國蔵氏は昭和41年(1966)4月30日に満74歳で永眠しました。「笛の國蔵」と呼ばれた氏は、亡くなる直前の4月15日、八甫の鷲宮神社の例祭で見事な笛を吹いていたといいます。

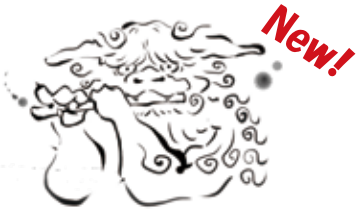
國蔵氏亡き後、保存会は昭和44年(1969)に新潟市で行われた関東ブロック民俗芸能大会に招かれ神楽を公開しました。このとき、民俗芸能を専門とする早稲田大学の本田安次教授がこの神楽を注目したことにより、翌年国から「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」として選択されました。このようなことから、一層全国で注目されるようになり県内外からの公演の要請により、神楽を公演する機会も増えていきました。

そして、昭和51年(1976)、本田安次氏の尽力もあり、神楽として初めて鷲宮催馬楽神楽が国の重要無形民俗文化財に指定されました。

現在、保存会には若い会員も加わり、神楽の保存・伝承に積極的な活動を行っています。

（文化財保護課　丸山　謙司）

新出！資料紹介



近年、資料館にご寄贈いただきました資料を紹介します。

東京両国通運会社川蒸気往復盛榮真景之図（野沢定吉画）/ 明治時代　縦36cm×横72cm

江戸時代までの水運は人力の舟が主流でしたが、明治時代に入ると、文明開化の影響を受け、西洋の技術を導入した蒸気船が登場しました。明治10年（1877）に内国通運会社が就航させた「通運丸」は江戸川・利根川を経て、東京深川扇橋（現東京都江東区）から生井村（現栃木県小山市）間を往復しました。久喜市内でも、栗橋は寄港地の一つとして数えられ、明治11年には栗橋を経て北河原（現埼玉県行田市）に至る航路も開設されました。

今回紹介する資料は、両国の発着所に至る通運丸を描いた錦絵で、当時の賑わいの様子が彩り豊かに描かれています。右手前の建物の軒先には寄港地の河岸名を描いた木札が掲示されており、その中に「中田　栗橋」の名前がうかがえます。黒い煙を吐きながら船体両側の水車を回転させて進む通運丸は、当時の栗橋に文明開化の息吹をもたらした象徴の一つだったといえるでしょう。（星野）

文化財調査の窓

歌舞伎図絵馬（久喜市指定文化財）／正徳６年（1716）
佐間、八幡神社所蔵

裏銘

特別展「久喜市の大絵馬」の調査により、市内で最も古い大絵馬は、正徳６年（1716）の「歌舞伎図絵馬」（佐間　八幡神社所蔵）であることが分かりました。この絵馬は、縦 151㎝、横 197㎝の大型の額に、扇子を手にした 13 人の舞い手が輪になって踊る「歌舞伎踊り」の様子を描いたもので、芸能史の上でも貴重な資料として市の文化財に指定されています。

この絵馬は剥落が進み、彩色や墨書も明瞭ではありませんが、絵馬を詳細に見ると、舞い手は、前髪を落とした（成人した）男性役者であることが分かります。中には月代を布で覆い隠す人や前髪がある若衆も何人か見られます。舞い手は皆、振袖姿で、髷を結い、日の丸などの扇を持っています。承応元年（1652）に若衆歌舞伎が禁止されたため、当時、野郎歌舞伎が行われていたといい、この絵馬はそれを反映していると考えられます。

輪の真ん中には、扇を持って舞い手を指揮する人や裃を着て笛・三味線・鼓・太鼓を演奏する囃子方が見られます。また、画面の上方左右の幕には、丸に隅立て四つ目紋と丸に木瓜紋がみられます。

画面の左端には墨書で、「正徳六丙申三月吉日　佐間村」とあり、絵師とみられる「村上義勝」の名前もみられます。また、画面下部には奉納者の名前が連記されています。中央には「道滿」とあり、奉納者のいる佐間地区の地名と思われます。「道滿」の地名は現在は失われています。

この絵馬には、裏面に次のような墨書があることが分かりました。

（裏銘）
八幡宮敬白／施主　栗原氏・金井氏／金子壱両弐分
大工三郎兵衛／武右衛門廿七才ニて廻りたて申候

これによれば、この絵馬は八幡宮に奉納されたものであり、施主が栗原氏・金井氏であったことが分かります。また、絵馬の木枠の作成・奉納に大工の三郎兵衛が関わり、金子一両二分を要したことが分かります。

注目されるのは、「武右衛門廿七才ニて廻りたて申候」とあることです。素直に解釈すれば、武右衛門なる人物が二十七才の時、歌舞伎踊りの舞い手として廻ったという意味であると考えられます。想像をたくましくすれば、もしかすると武右衛門は佐間村の出身で、歌舞伎踊りの舞い手として故郷の八幡神社で舞を披露したことを記念して、絵馬が奉納されたのかもしれません。当時の風俗画としても貴重なものです。

（郷土資料館学芸員　栗原　史郎）

お知らせ情報

「古文書学習会」　参加者募集

受講生による古文書解読を行い、その内容に対して講師による解説を行います。

場　　所　郷土資料館視聴覚ホール
日　　時　令和２年５月 15 日・22 日、６月５日・19 日、７月３日・17 日、９月 18 日、10 月２日・16 日
令和３年２月５日・19 日、３月５日
（全 12 回）　各金曜日　14 時～ 16 時
講　　師　久喜市文化財保護審議委員　林　貴史　氏
対　　象　市内在住・在勤・在学者および郷土資料館ボランティア
定　　員　40 人（申込順）
費　　用　テキスト代として実費
申　　込　令和２年４月 15 日（水）10 時 00 分から
申込方法　郷土資料館の窓口に直接か、電話でお申込みください。

郷土資料館　ボランティア募集

（講座では子どもたちにおもちゃづくりを教えます）

子どもたちに昔の道具について教えたり、古文書の整理をお手伝いしてくださる方を募集しています。

期　間　令和２年４月１日から令和３年３月 31 日まで
場　所　郷土資料館ほか
内　容　展示案内の補助、子ども向け講座の補助、古文書整理の補助
対　象　18 歳以上で、郷土資料館の活動に興味のある方
申込方法　郷土資料館の窓口に直接か、電話でお申込みください。

電車で
■東武伊勢崎線　鷲宮駅下車　徒歩 15 分
■JR宇都宮線　東鷲宮駅下車「豊野コミュニティセンター」行きバス「図書館入口」下車　徒歩２分

自動車で
■東北自動車道　加須インターから 10 分
久喜インターから 25 分

久喜市立郷土資料館だより
笛の音　第 10 号

発　行　令和２年（2020）３月 10 日

久喜市立郷土資料館
〒 340-0217
埼玉県久喜市鷲宮 5-33-1
電　話　0480-57-1200
e-mail　kyodoshiryokan@city.kuki.lg.jp
URL　http://www.city.kuki.lg.jp/
開館時間　午前 10 時～午後６時
休館日　月曜日（祝日除く）、年末年始、祝日の翌日、月末金曜日
入館料　無料
※有料の特別展を開催する場合があります